

山形県埋蔵文化財調査報告書 第50集

郷の浜 J 遺跡

山形県教育委員会
山形県埋蔵文化財調査団

1981

ごう はま
郷の浜 J 遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

序

県道鶴岡・羽黒線改良工事にあたって、本「郷の浜J遺跡」がその路線内に含まれるので、前年から庄内支庁道路改良課との間に協議を重ねてまいりました。この路線については、早期実現について地元の要望も強いので、路線にかかる部分を発掘調査し記録保存を行うことになりました。

出羽三山の一つである羽黒山麓の手向は、三山旨でのメッカとして古くから栄えたところですが歴史時代以前の遺跡も数多く、山麓に起伏するなだらかな台地に分布しています。山紫水明の自然条件に恵まれた出羽三山の麓は、先史時代にあっても人びとの生活の場として栄えたことだろうと思います。県指定史跡の「玉川遺跡」をはじめ、貴重な遺跡が数多く見られます。

この度の調査は、工事に直接かかる部分のみを対象にしたため、当時の住居跡などは発見されませんでしたが5,000年前の文化交流を物語る土器や石器が出土し、学術研究上重要な課題を提起しているようあります。

調査にあたって、いろいろ御配慮いただいた庄内支庁道路計画課、地元の羽黒町教育委員会、手向部落、土地所有者の芳賀徳子氏に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

1. 本書は山形県教育委員会が昭和55年度に実施した、県道鶴岡・羽黒線道路改良工事に伴なう郷の浜J遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和55年9月8日から同年10月7日まで行った。
3. 本書の作成は、川崎利夫、野尻 侃、安部 実が担当執筆した。
4. 実測図等の作成においては中村敬三、佐藤正子、石井 節、水落みち子の協力を得た。
5. 編集・写真撮影は安部 実が担当した。

調　　査　　体　　制

調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	山形県教育庁 庄内教育事務所埋蔵文化財分室 川崎利夫（主査） 野尻 侃・安部 実（技師）
調査協力	羽黒町教育委員会 庄内支庁土木部道路計画課
事務局	主 幹 小嶋茂太（庄内教育事務所長兼埋蔵文化財分室長） 主幹補佐 佐藤良一（同 次長） 事務局員 大須賀芳夫（同 総務課長） 菅原 猛（同 総務主査） 吉村庄子

目 次

I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の概要	1
II 遺跡の概要	
1. 立地と環境	3
2. 遺跡の層序	6
III 遺構と遺物	
1. 遺構・遺物の概要	9
2. 遺構	9
3. 遺物	10
IV まとめ	23

挿 図 版

第1図	遺跡位置図	2	図版1	遺跡近景
第2図	遺跡全体図	4	図版2	SK5土壤跡・SP群
第3図	調査区全体図	5	図版3	出土土器
第4図	土層図	7	図版4	同 上
第5図	出土土器分布図	8	図版5	同 上
第6図	SK5土壤跡	10	図版6	同 上
第7図	出土土器	11	図版7	同 上
第8図	同 上	13	図版8	同 上
第9図	同 上	14	図版9	同 上
第10図	同 上	16	図版10	同 上 SK5土壤跡
第11図	同 上	17	図版11	出土石器
第12図	同 上	18	図版12	同 上
第13図	石器実測図	20		
第14図	磨石・凹石・石皿実測図	21		

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

県道鶴岡・羽黒線改良工事により手向部落の北側を通り通称羽黒バイパスの事業はかねてから計画されていたが、路線が決定し地元におよされたのは昭和54年であった。その段階から、工事主体である庄内支庁土木部道路計画課、羽黒町役場の主管課、羽黒町教育委員会との間に、路線内に「郷の浜」遺跡が含まれるので種々協議がもたれていた。

同年10月に行われた来年度遺跡にかかる土木工事等のヒアリングにおいても、路線変更是不可能であり、遺跡の一部にかかるることは避けられない情勢であったので、昭和55年度に庄内教育事務所埋蔵文化財分室において発掘調査を行うことが確定した。それにもとづき同分室では、昭和54年10月12日に現地に赴き、範囲や遺跡の性格等を把握するための事前調査を実施した。

その結果により、県教育庁文化課と庄内教育事務所では庄内支庁道路計画課と再三にわたり協議し、昭和55年9月8日より10月7日まで約1か月間、調査経費全額事業側負担によって発掘調査を行うことになった。なお発掘調査に先立って8月29日、羽黒町農村改善センターにおいて関係者が集まり事前の打合わせ会を行い、予定通り9月8日より発掘調査を実施したのである。

2. 調査の概要

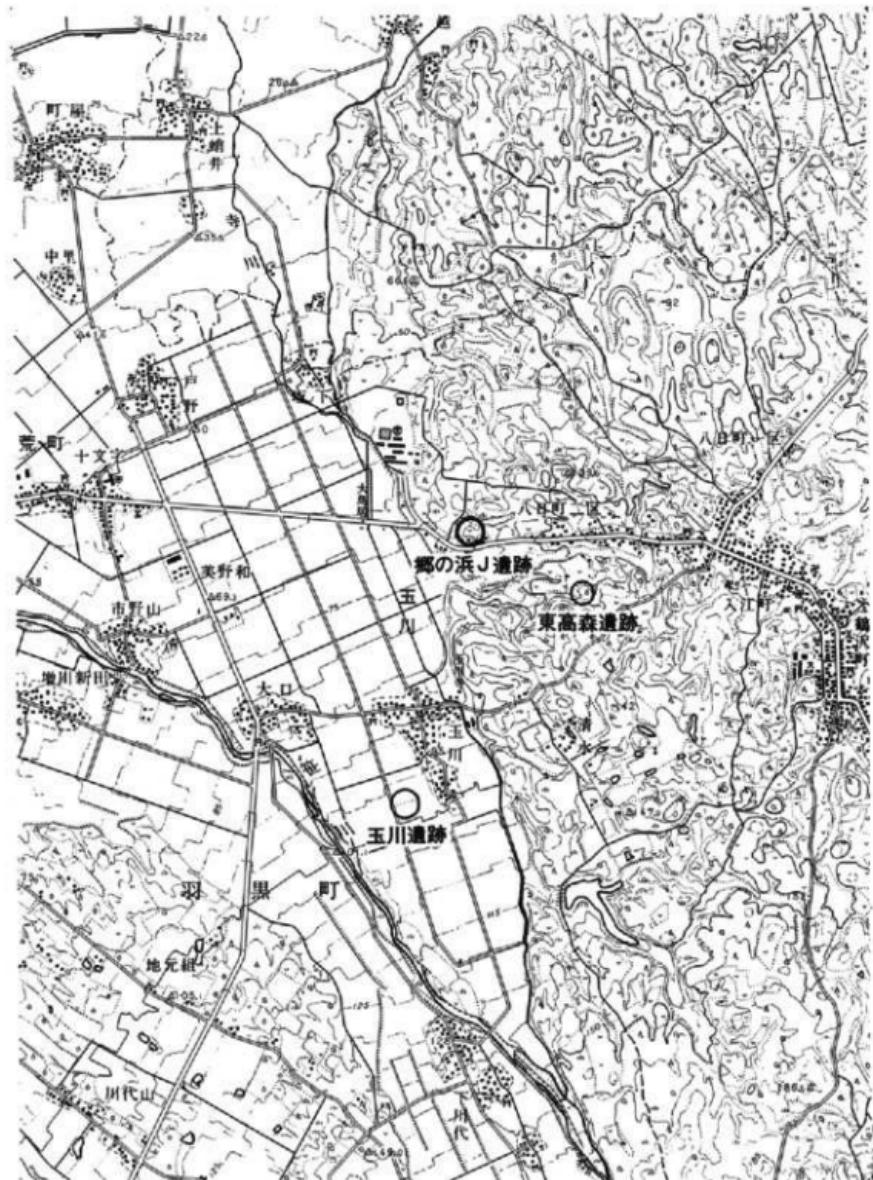
調査は遺跡にかかる長さ40m、幅20mの計画路線内を対象に2m×2mを一単位とするグリッドを設定した。東西をX軸、南北をY軸とし、Y軸はN-8°20'-Eを測る。

9月8~12日　　設定したグリッド内の遺物分布状況を把握するため任意に試掘する。調査区東辺部は地山層が急激に落ち込んでいる。北辺のグリッドより、わずかの土器片の検出をみる。

9月16~19日　　南北8ラインを掘り、これの土層断面を観察し測図した。14・15・2・3グリッドⅡ層下部で土器片が集中して検出された。遺構は検出されなかった。遺物の散布は特に調査区北辺部でみられた。これにより調査は北辺部に集中することとした。

9月24~26日　　試掘した各グリッドでは天地返し等の擾乱が著しく、土器片の出土は認められるが、遺構は検出されなかった。

9月29~10月7日　　試掘した各グリッドを面精査した。8-1グリッド北壁で遺構を検出。北に1m拡張した結果、直径約1mの土塹であった。7-1グリッドでは3基のピットを検出した。10月2日には現地説明会を行い、7日に調査を終了した。



1:25,000 羽黒山

第1図 遺跡位置図

500 1,000 1,500

II 遺跡の概要

1. 立地と環境

郷の浜J遺跡は、鶴岡市より東へ9km、出羽三山の一つ羽黒山の西麓にある。この附近一帯は月山火山の泥流によって形成された台地上にあり、標高90m前後をはかる。庄内平野東南部の縁辺部にある。附近一帯は平地部へのびる舌状の小台地がいくつも起伏し、その間を小さな沢が刻む。台地上はほとんど遺物が散布し、縄文時代より平安時代に至るまでの集落跡または遺物散布地であることが確認できる。この台地の成因は、月山泥流層の上に火山灰が載って形成されたものである。

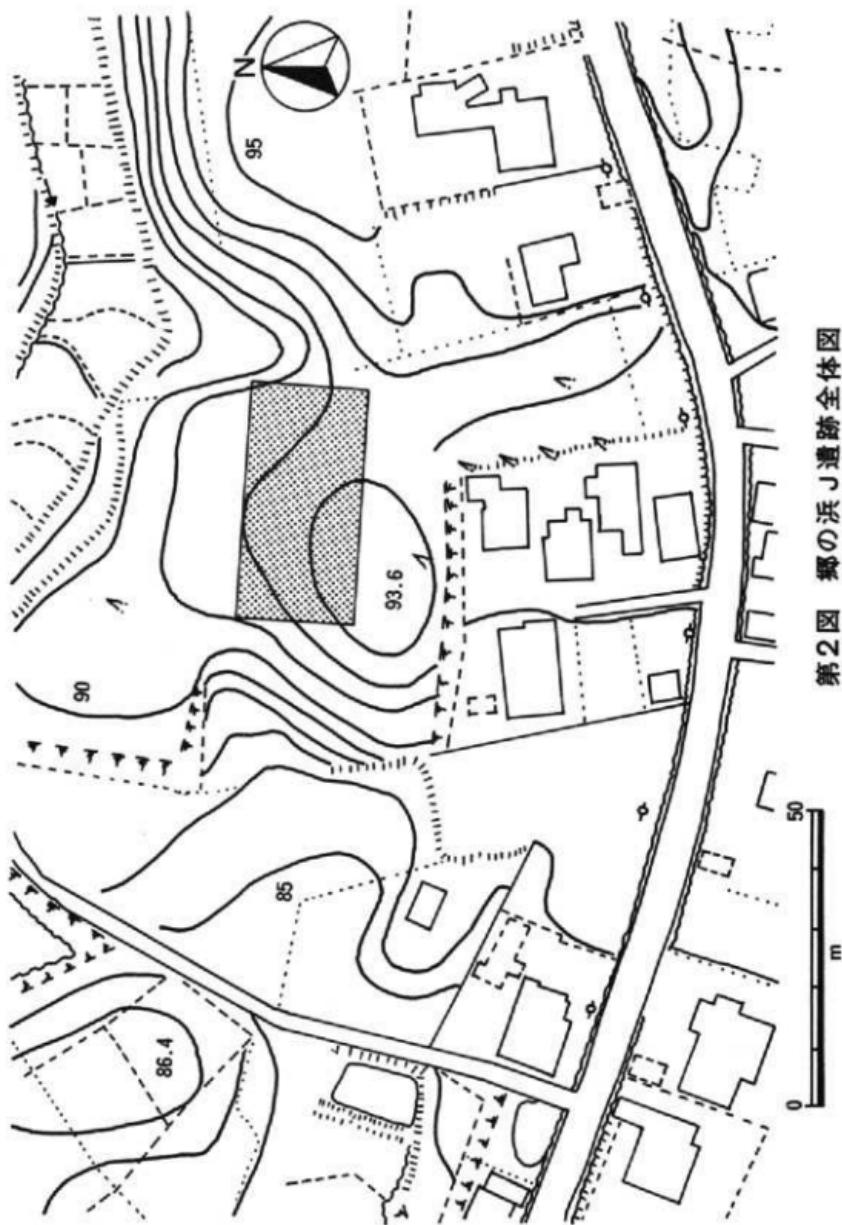
郷の浜遺跡群は、AよりJ地点まで10か所確認されており、羽黒町手向から藤島町東堀越まで及ぶ。縄文中期、晚期、平安時代の須恵器や赤焼土器の出土が認められる。すでに失われたが、羽黒学園の近くには須恵器窯跡もあった由である。今回の調査期間中にも縄文晩期大洞C₂式期の土器が出土する「東高森遺跡」、羽黒学園東側より平安時代の赤焼土器を出す遺跡など2か所の新規遺跡を確かめている。

郷の浜J遺跡は、県道鶴岡・羽黒線にそって細長く連なる羽黒山の門前町手向集落の入口、県道の北側に位置し、東西40m、南北45mほどの広さの丘陵一帯が遺跡である。遺跡のもっとも高いところは、まるいなだらかな丘になり、標高93.6mで県道の附近からの比高は8.6mである。この丘は西側が急傾斜の斜面をなし、北側に低くのびて沢にのぞみ、東側は一段高い台地が連っている。南側は45mほどで県道が走っているが、その間は宅地となっている。かつてこの遺跡の附近一帯は松林であったらしいが、最近になって柿畠として利用されている。新設の路線は遺跡をふくむ丘陵上を東西につきり、県道のバイパスとして、のり面もふくめ幅員20mで敷設される予定である。

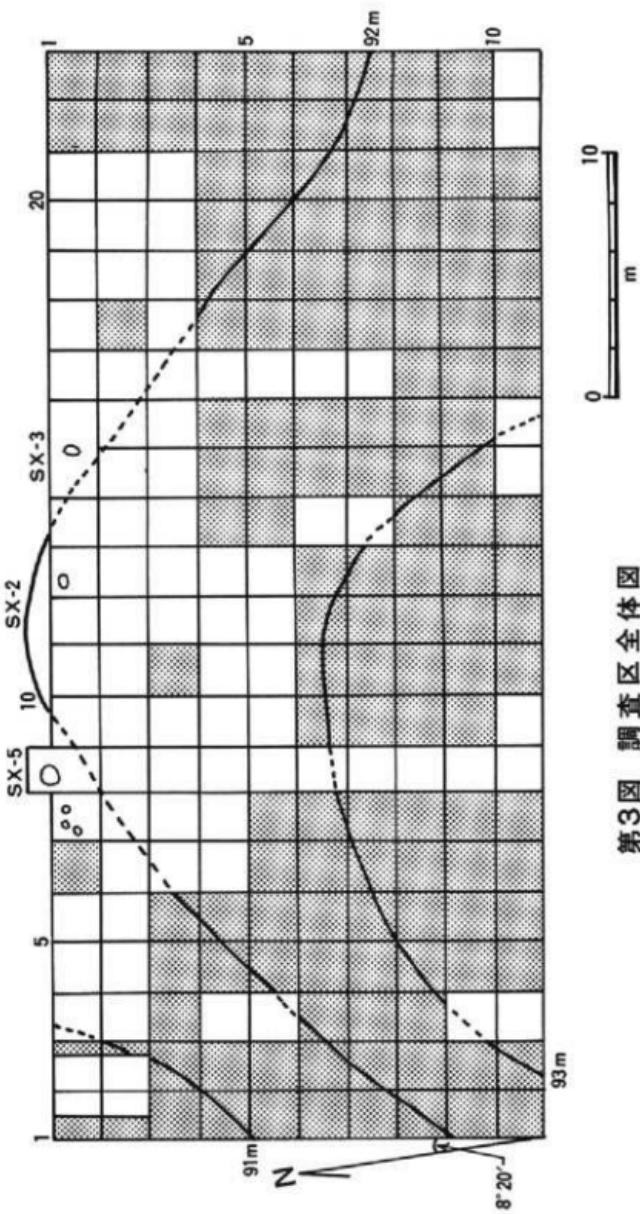
この遺跡の附近には本遺跡をふくむ郷の浜遺跡群をはじめ、多くの遺跡が密集して分布し庄内地方でも遺跡に富む地域である。本遺跡の東側の台地には沢をへだてて中世の館跡「蝦夷館遺跡」(遺跡番号1780)が、よく往時の面影を残して存在している。さらに、その南側の手向部落南の丘陵には「羽黒百穴」(遺跡番号1783)がある。これはまだ性格不明とされる遺跡である。さらに本遺跡の南側の台地下、玉川の周辺には硬玉製玉類や玉砥石などを多量に出土した縄文晩期を主体とした「玉川遺跡群」があり、その中のC遺跡は県指定史跡として整備中である。また、その南には「川代遺跡群」があり、縄文時代の遺跡が小河川の段丘上や山麓の台地に教多くの分布をみる。

庄内平野の東南を画するこのあたりは、なだらかな丘陵や台地が連なり、小河川がいくつも流下して、縄文時代において恵まれた自然環境となっていたことを示している。

第2図 郷ノ浜J遺跡全体図



第3図 調査区全体図



2. 遺跡の層序

遺跡は月山火山の泥流によって形成された台地で西側が急傾斜し、東側は一段高い台地が連なっており北方へ低く舌状にのびている。道路は、この台地を横断する形で設置される。台地を覆う土層は4層に分かれ、以下にその観察を記述する。

第Ⅰ層 茶褐色土 翳作土で、細かな砂質である。草根が多く厚さ10~20cmに堆積している表土層。

第Ⅱa層 暗橙色土 軟かく微砂質である。炭化粒子を含み、やや粘性がある。斜面裾部付近に堆積し厚さ10~15cm、遺物包含層である。

第Ⅱb層 黒褐色土 微砂質で炭化粒子を含み、やや粘性がある。遺物を多く包含し、厚さ15~20cmにレンズ状に堆積している。

第Ⅱc層 暗褐色土 軟かく微砂質で炭化粒子を含み、やや粘性がある。斜面上位に堆積し、草木の根が入り込んでいる。厚さ10~15cm。

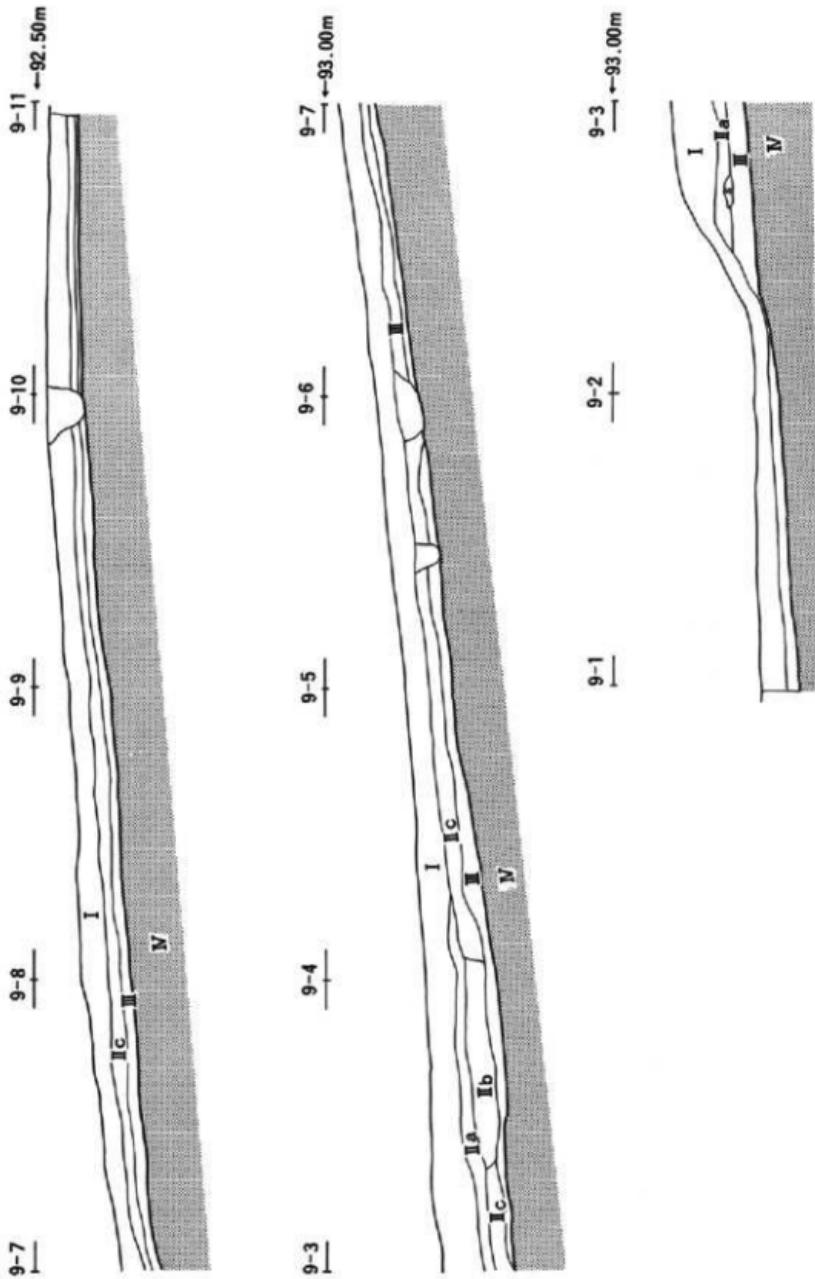
第Ⅲ層 暗黄褐色土 第Ⅱ層が混在している。第Ⅳ層の黄褐色土の漸移層と考えられ、本遺跡の遺構の掘り込みが下位より始まる。厚さ15~25cm。

第Ⅳ層 黄褐色土 粘質微砂質土で地山層である。

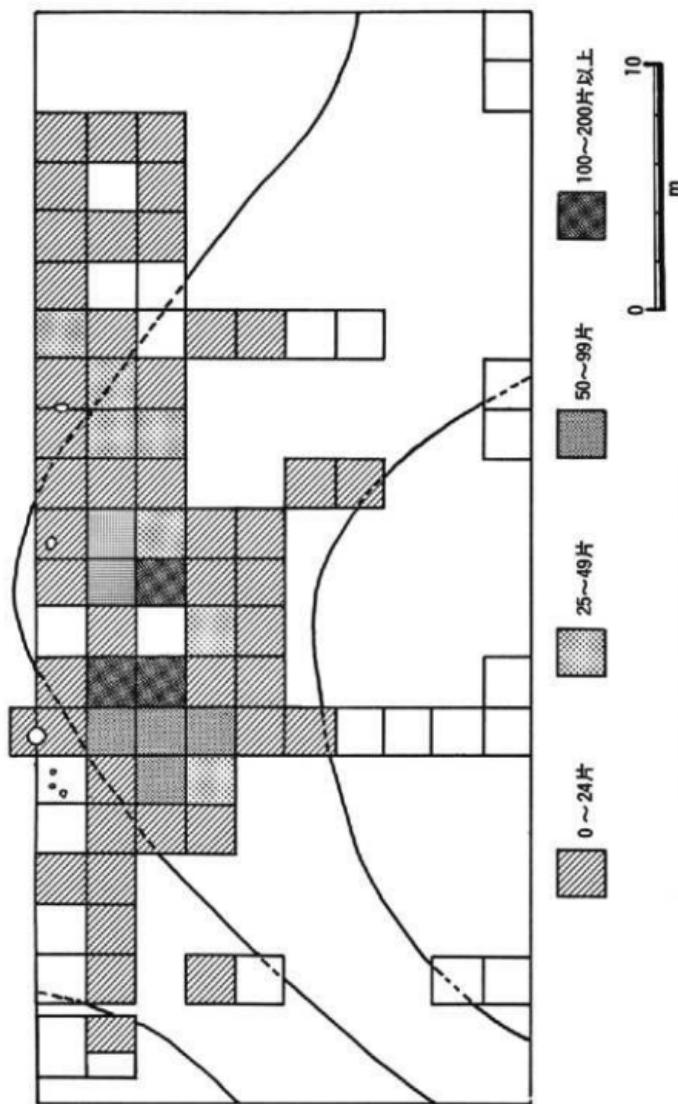
各土層の堆積状態は、台地全体は以前松林となっており、抜根や以後の柿畠地開墾で天地返しなどが地山層まで達し、擾乱が激しく遺物包含層がわずかに残っているだけである。しかし、Ⅱa・Ⅱb層の堆積している斜面裾部から平坦部にかけての地域が遺物包含層として存在する。全体的にゆるやかな傾斜となっており、北部の平坦な舌状部へ包含層が続くものと考える。遺構は第Ⅲ層下位より掘り込まれ、粘性の強い黒褐色土で覆われ、炭化物・赤色粒子を多く含む土層となっている。



第4図 土層図



第5図 出土土器分布図



III 遺構と遺物

1. 遺構・遺物の概要

調査で検出した遺構は土壙1、ピット3、性格不明の土壙2である。台地は調査区南部でもっとも高いところとなり、北辺部はなだらかな斜面となっている。斜面裾部は畠地開墾で平坦部となり、遺構・遺物の集中区域は斜面裾部から平坦部に存在し、遺構は7~15-1~3グリッド内に在る。遺物は第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて多く出土し、その集中区域は8~15-2~4グリッドにある。特に竹管文を主体とする土器片は台地中央部10~15-2~3グリッド付近で多く出土し、縦条体圧痕を施文する土器片は台地西部8·9-3·4グリッド付近で出土した。調査区の試掘作業では竹管文を主体とした土器片が多い。遺物の集中区域は台地西部から中央部にかけて存在する。遺構は遺物の出土にくらべて少ない。天地返しや抜根などの攪乱で、上層においては遺構の検出はなかった。発見されたSK5土壙跡は台地斜面がはじまる肩部で検出されており、遺構・遺物は北方へのびる舌状部の台地へ続くものと考えられる。

2. 遺構

SK5土壙跡（第6図・図版2）

調査区北西部平坦地、8-1グリッド内で検出。付近にSP6·7·8が検出されている。第Ⅳ層上面を精査した際発見したもので、第Ⅲ層下位よりその掘り込みが始まる。遺存状態は良好である。平面形はほぼ円形を呈し、大きさは径約95cm、深さ52cmでわずかに袋状を呈する。壇底は平坦で、覆土は3層に区分されレンズ状に堆積している。出土遺物は土器片のみで、覆土3層より7片出土している。土壙の北壁には径25cmのピットEP9が円錐状に傾斜して掘り込まれ、本土壙に付随するものと考えられる。いわゆる貯蔵穴の形態、及び覆土3層に炭化物等を含むことから推定すれば、貯蔵穴と考えられる。時期は出土した土器片により、縄文時代前期末大木6式期の所産である。

SP6·7·8（図版2）

SK5土壙の西側、7-1グリッドで検出されたピットで、径約30cm、深さ10~26cmを測り、覆土は暗褐色粘質土で炭化物粒子を含む。SP7ピット内から土器底部片が出土した。

2. 遺 器

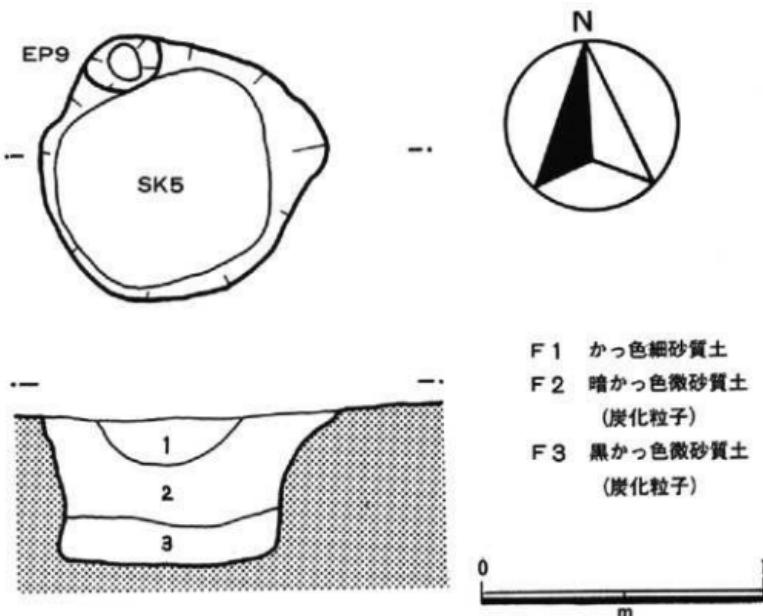
(1) 土 器

調査で検出された土器片は1,680片である。そのうち1,617片が遺跡を覆う第Ⅰ～Ⅲ層中より出土したもので、遺構内からは63片の出土がある。土器は第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器に大別し、縄文時代中期初頭大木7式期の範囲に入るものである。分類は第Ⅰ群を竹管文を主体としたもの、第Ⅱ群は撚糸文を主体としたもので施文方法で分けた。また類別は土器に描かれた技法、及び文様別に分けた。

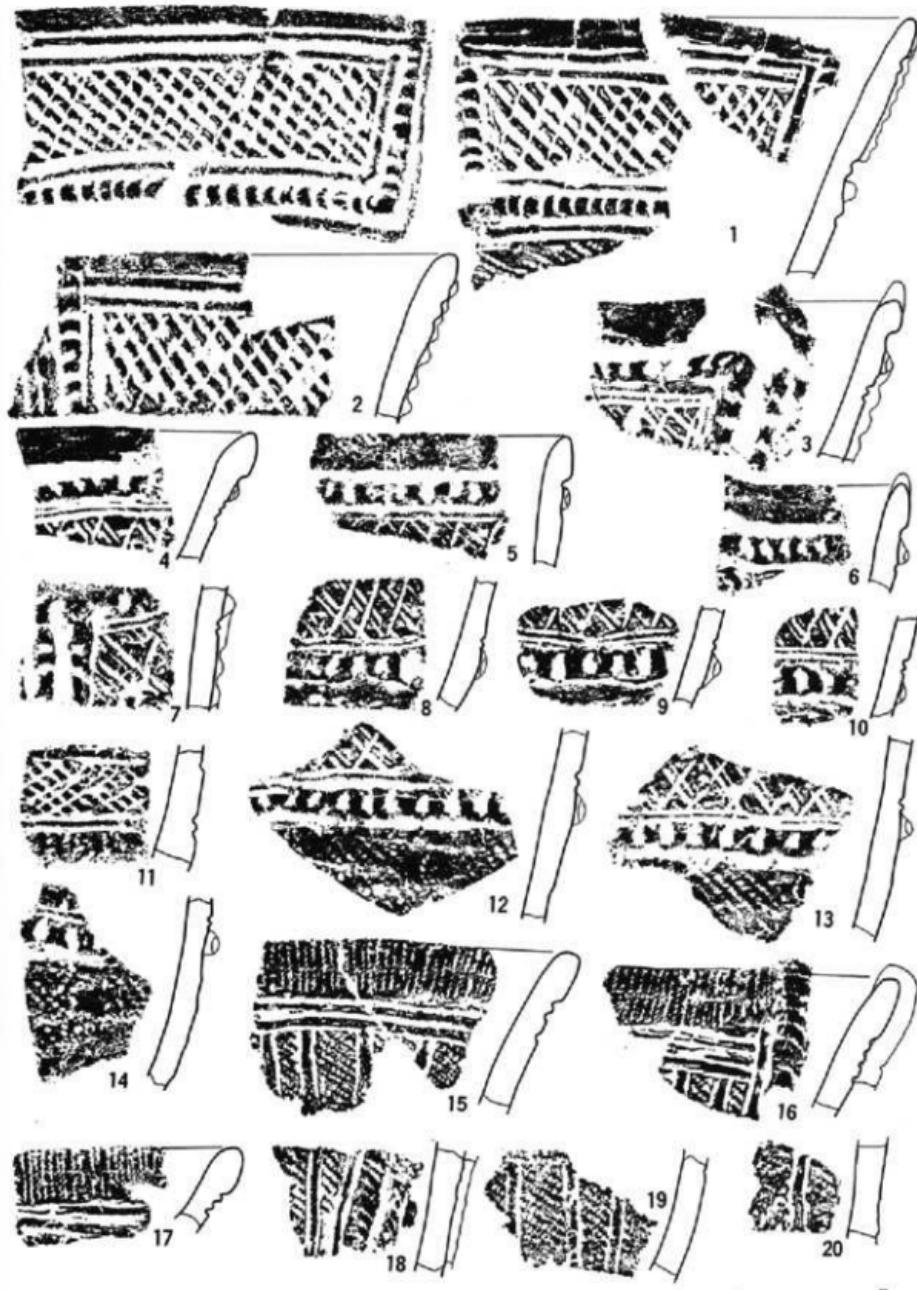
第Ⅰ群土器 第一文様体に集中しているもので、半截竹管による格子目状、横と縦の平行沈線、集合沈線、刺突、結節状の沈線などのものである。

a類 (第7図・1～14)

口縁部文様体は粘土紐を張り付けたうえに半截竹管で爪形文を施し、区画した内部を半截竹管による格子目文を施文したもので1・2は同一個体と考えられる。3～14は同様な施文法であるが、区画した内部をヘラ状工具で格子目を施したものである。また口縁部の文様構成は4単位となり、構成される縦ぎ目をわずかに波状にしているものもある。器種は深鉢形土器で、胎土・焼成共に良好である。



第6図 SK5土壙跡



第7図 出土土器

第I群土器 a類 1~14 b類 15~20

0 5
cm

b類 (第7・8図 15~31)

地文に縄文、縱と横の平行沈線を施すもので、15~17は口唇部に刻目状の撚糸圧痕が施される。口唇部下は平行沈線が横位に引かれ、区画するように縦位の沈線が引かれている。27は隆帯の上にも撚糸圧痕を施している。29は三角の平行沈線が施され、30・31は半截竹管を縦に平行沈線としたものである。

c類 (第8・9図 32~51)

集合沈線を主体としたものである。32~45は半截竹管による山形文が施されたもので、口縁部に撚糸圧痕を刻目状に施し、半円状に半截竹管による平行沈線を描いている。35は口縁部の突起であるが、格子目が施されている。39~42は同一個体と考えられる。口縁部を台形に磨き、平行沈線を三本引いた下に山形の沈線を施している。40には文様構成の縦ぎ目部に粘土紐を張り付け、その上を半截竹管で連続刺突している。46~51は平行沈線の間に斜状の沈線を施しているものである。器種は浅鉢が多く、50は深鉢片である。胎土中に小石を含み、焼成は堅い。

d類 (第9図 52~55)

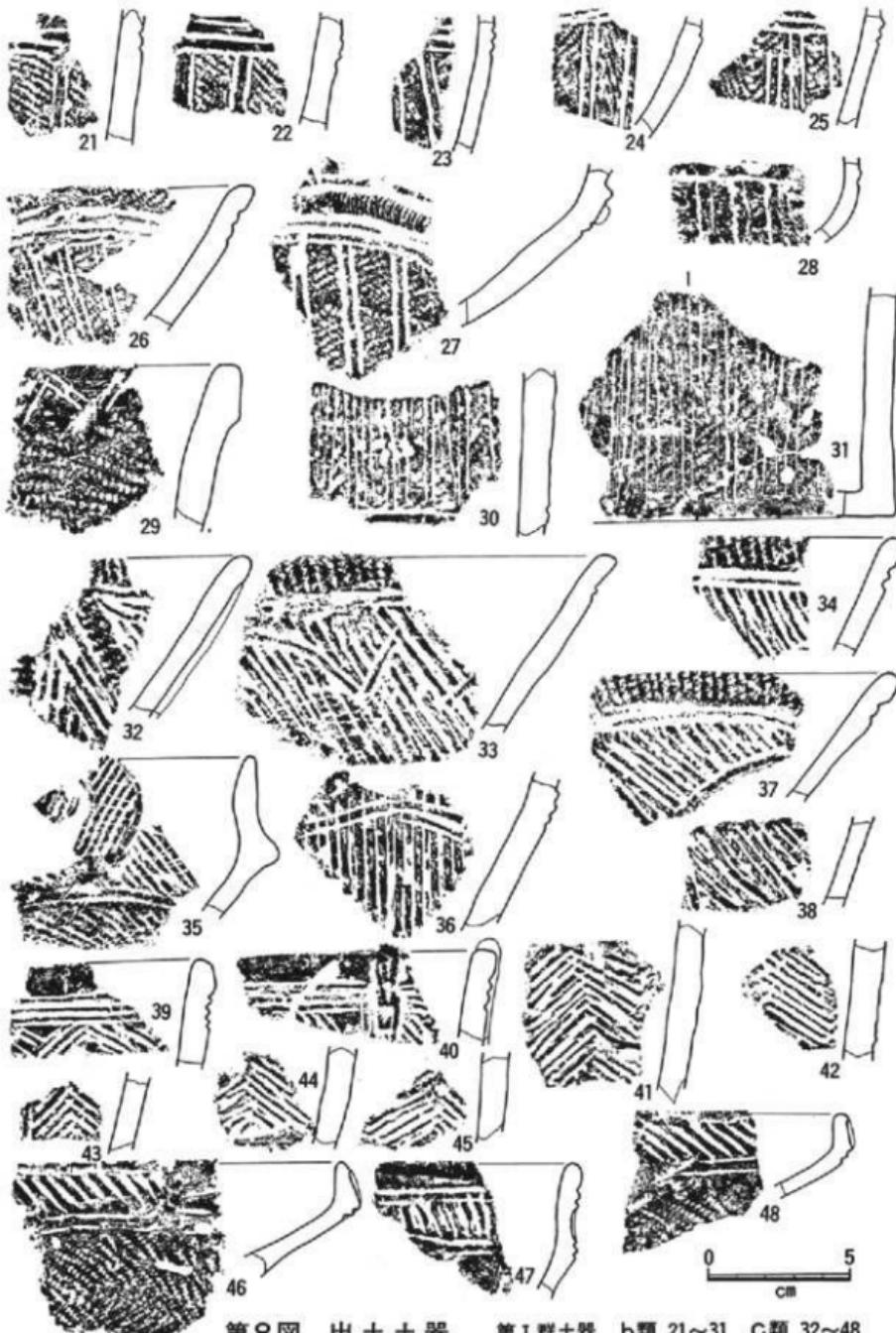
刺突されているものをd類とした。52・53は口縁部に粘土紐を張り付け、文様構成の縦ぎ目を粘土紐で区画し竹管で刺突している。区画された内部には、沈線で横位に線引きされた中を上から下へ連続刺突されている。54・55は横位に沈線が引かれた間を円形竹管による刺突が施されている。胎土・焼成共に良好である。

e類 (第9図 56~62)

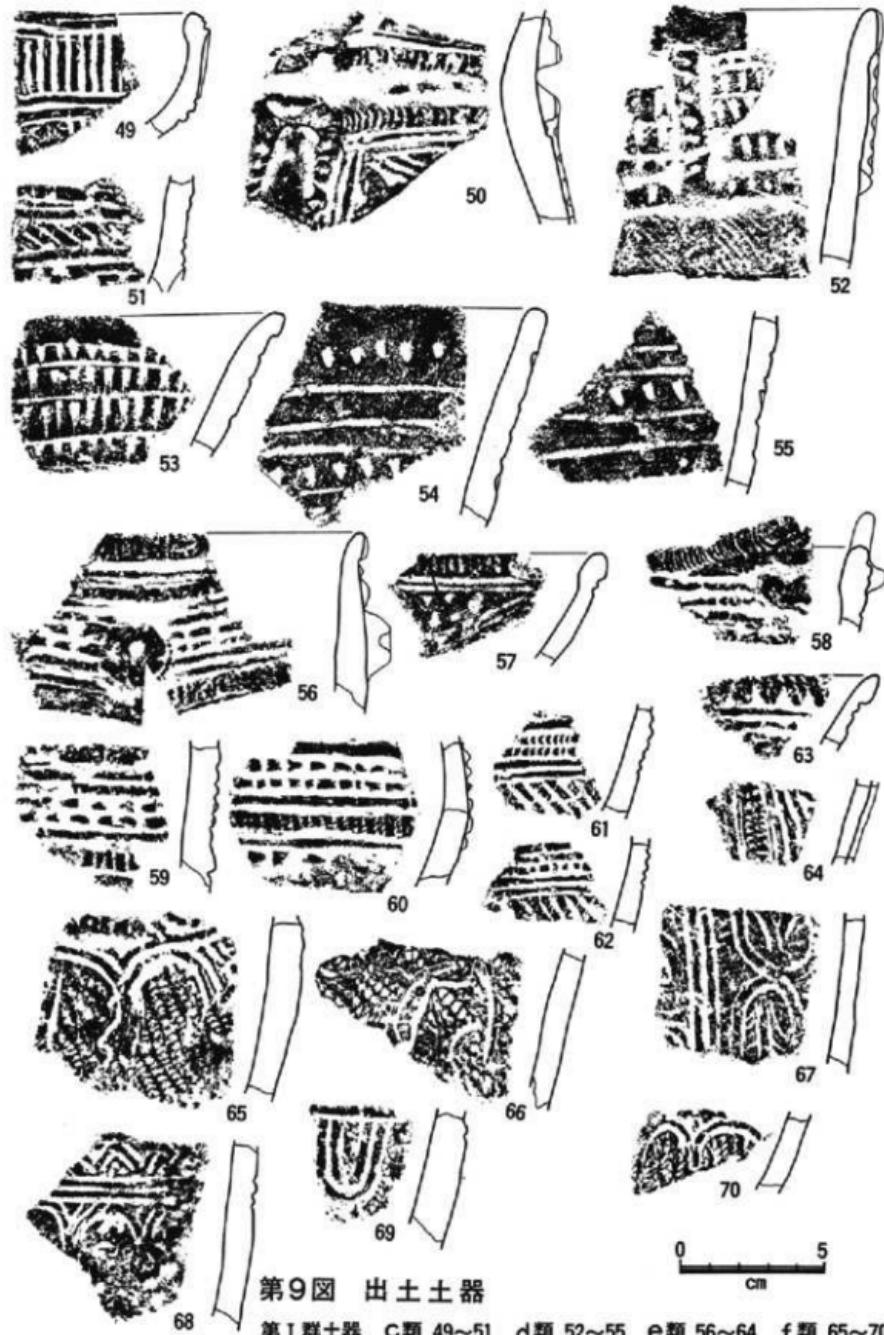
結節沈線が施されたものである。56は数条の半截竹管を横走させたり、粘土紐を張り付けたりし、ボタン状の粘土を張り付け、その左右には半截竹管による結節沈線を横位に連続刺突している。57は口縁部を竹管により刻み目を施し、その下には平行沈線を横位に線引きし、三角形の刻印が四点施文されている。59・60は粘土紐を張り付けた上に半截竹管による連続刺突を施している。63は口縁部に三角沈刻文を刺突しているもので、その下には二条の平行沈線が施文されている。

f類 (第9図 65~70)

竹管による半円状を描いているものを表出した。65は地文に縄文を施し、半截竹管によって半円状に描いている。66も地文に縄文、竹管による直線や半円を描いている。67は縦に二条の平行沈線で分け、S字状の沈線を重ねて円を描いている。68は横位に半截竹管を施し、上下に半円を描いている。69は半円を渦状に施し、70は半円の中を縄文が施されている。



第8図 出土土器 第I群土器 b類 21~31 C類 32~48



第9図 出土土器

第I群土器 C類 49~51 D類 52~55 E類 56~64 F類 65~70

第Ⅱ群土器 繩文を施されるものを一括した。なかには縄文・S字状結節・羽状縄文・木目状撚糸文・撚糸圧痕文・絡条体圧痕文が施されているものである。

a類 (第10・11図 71~100)

71~74は縄文が施されるもので、71は口唇部を折り返しており、LRの縄文を横位にころがし斜行縄文としている。72・73は単節のRL縄文である。74はこの類に入れるべき土器ではないが、撚糸を軸回転させたものである。75~84はS字状結節の回転である。85~89は結束第1種の羽状縄文である。85は羽状縄文の節に結節を施し、S字状と羽状が施文している。87は縄文圧痕の下にS字状結節、さらに羽状が施文されている。90~95は、いわゆる木目状撚糸文である。90は横位に三条の半截竹管で線引きされた下に、木目状撚糸文を施文しているものである。95は底部片である。96~100は、いわゆる網様撚糸文である。

b類 (第11図 101・112)

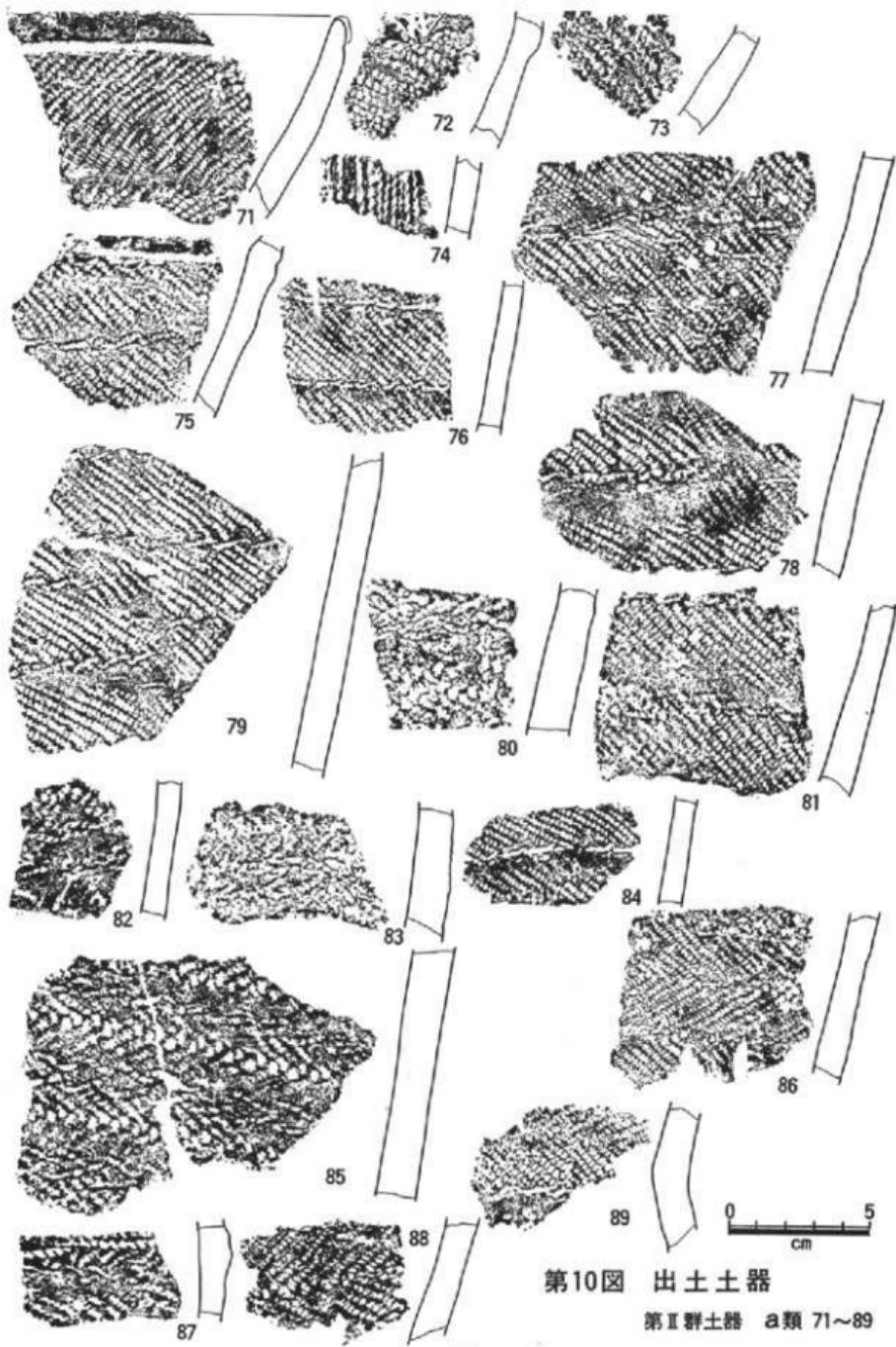
撚糸圧痕を主体としたものである。101~103は口唇部に撚糸圧痕を刻目状に押捺し、平行な数条の撚糸を圧痕している。101は下部で斜状に圧痕している。104~112は横位に平行に3条から6条の撚糸を押捺している。104・108~110は撚糸の横位押捺下に粘土紐を張り付け、その上を撚糸で刻み目の押捺を施している。粘土紐の張り付けを施しているその下には、RLの斜行縄文を施文している。106・111は粘土紐を張り付けた上を半截竹管による刺突を施し、平行な横位の撚糸を圧痕している。粘土紐の張り付けは106が横位に、111は縦位に張り付けている。112はこれらの類に該当しないと考えられるが、粘土紐を張り付けた上に撚糸を刻み目状に押捺しており、粘土紐の下は単節RLの縄文を施文していることから類に入れた。以上**b類**のなかで105・107・108は同一個体と考えられ、深鉢を呈する。**b類**は胎土・焼成共に良好である。

C類 (第12図 113~117)

絡条体圧痕を一括した。113~115は同一個体である。口縁部を山形突起、口縁部と頸部隆帯間にボタン状貼付文がみられ、山形突起間にX字状になるように単軸絡条体圧痕文が施文され、ボタン状貼付部にも縦位の単軸絡条体圧痕文を押捺している。頸部隆帯上には方形の刺突文が施されている。116・117は6条の単軸絡条体圧痕文が施文され、頸部の隆起された上には半截竹管による刺突が施文されている。頸部隆帯下には単節RLの縄文が施文されている。胎土中に小石を含み、焼成は軟かい。

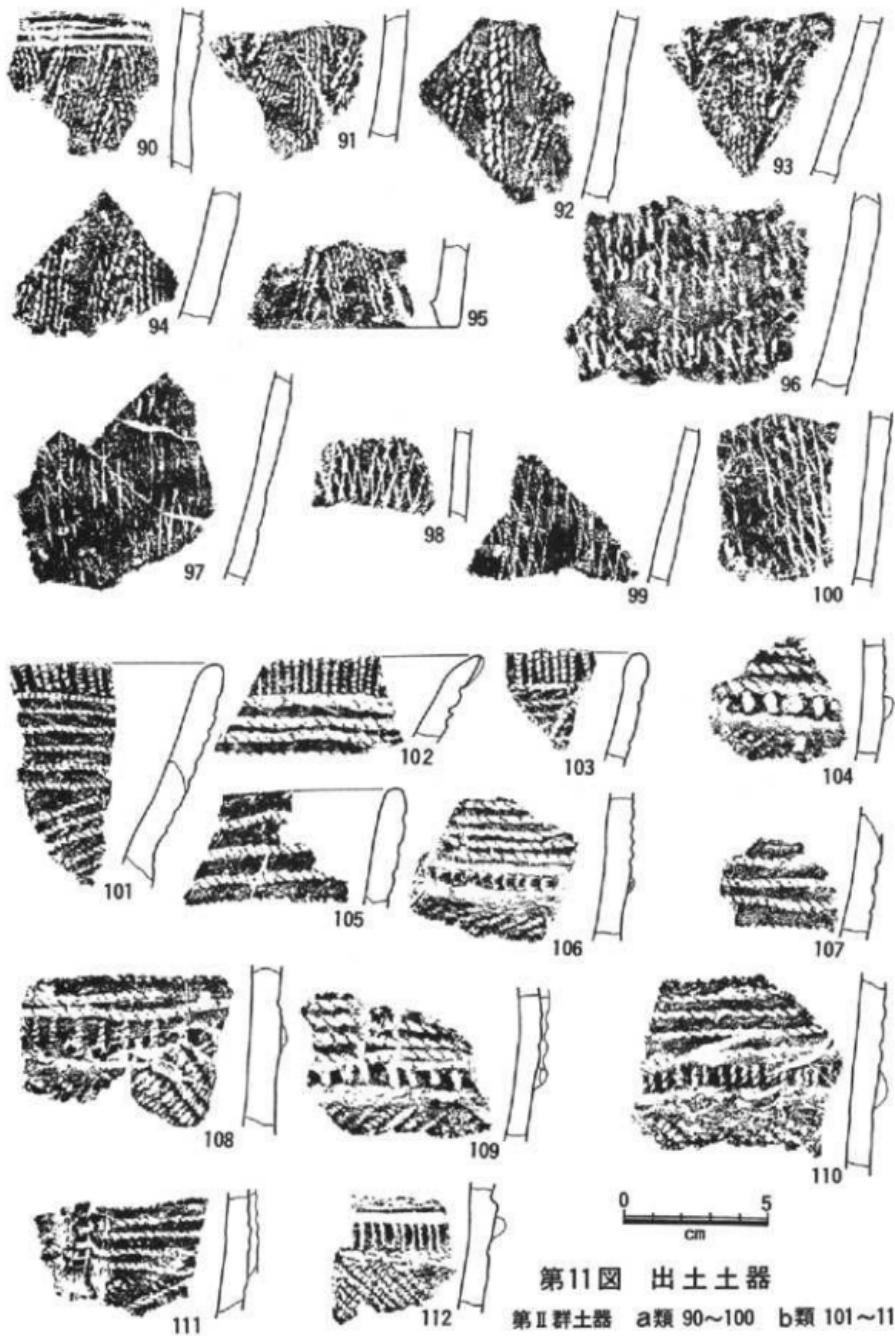
SK5土器跡出土土器 (第12図 118~121)

覆土3層中より出土したものである。胎土中に多量の繊維を含み、焼成は軟かく同一個体である。118・119は口縁部でわずかに外反し、口唇部に竹管による爪形の刺突が施文されている。裏面には繊維で器面調整された痕を残している。120には表面に単節RLの縄文

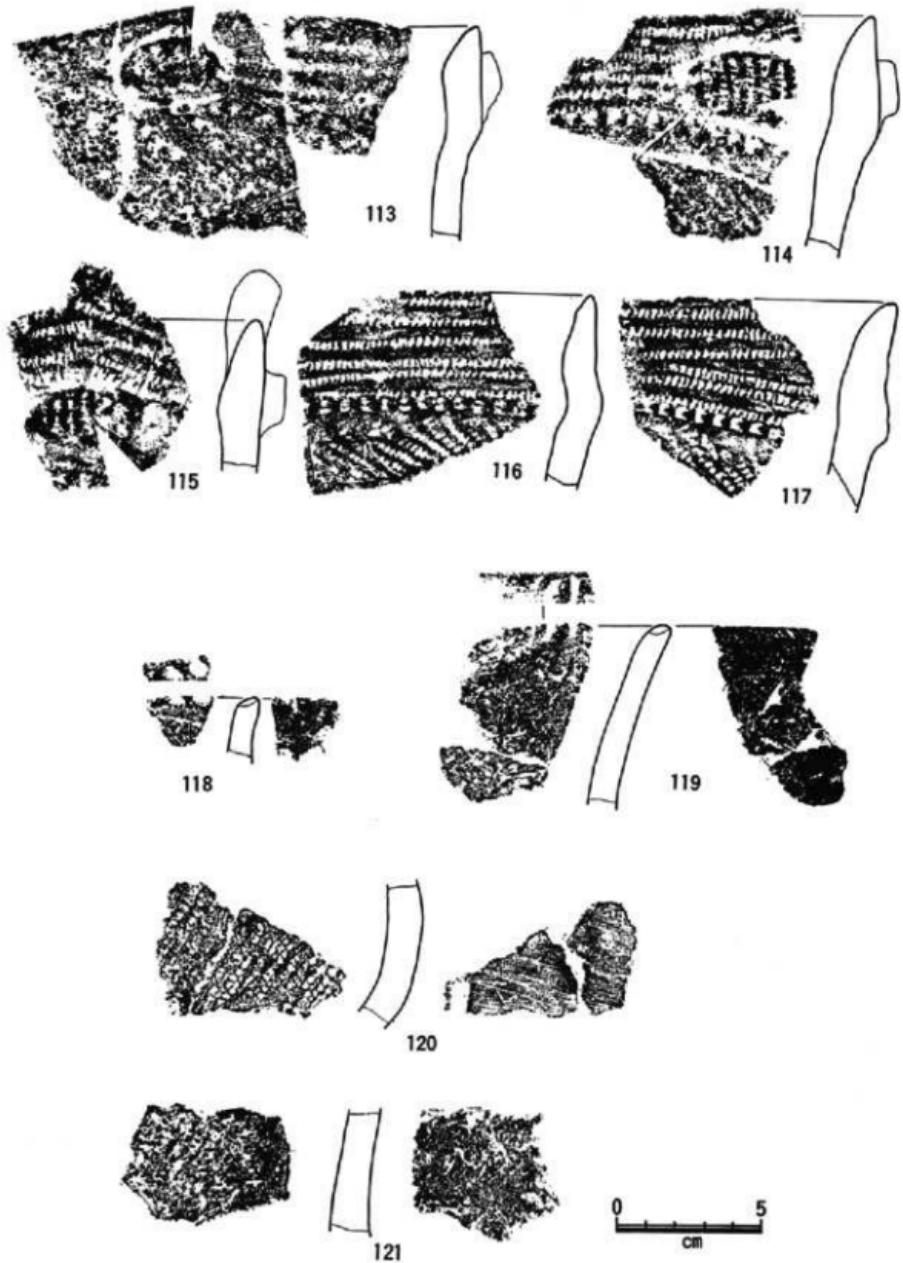


第10図 出土土器

第Ⅱ群土器 a類 71~89



第11図 出土土器
第二群土器 a類 90~100 b類 101~112



第12図 出土土器 第II群土器 C類 113~117 第5号土壤 118~121

を浅く施しており、その他の土器片にも同様に施文されているものと思われるが煮沸の際の炭化物が付着しているため施文された縄文が見えない。本遺跡のⅡ・Ⅲ層出土の土器片とは異なっており、時期的に若干下る大木6式期の所産である。

(2) 石 器

本遺跡で検出された石器は104点を数える。器種は石皿5点、凹石1点、磨石30点、箆状石器2点、石匙2点、磨製石斧1点、製作途中の石器5点、使用痕のある剝片6点、黒曜石片18片、石核2点、剝片32点である。石質は頁岩・粘板岩・黒曜石である。

a. 打製石器 (第13図・図版11)

箆状石器 (1・2)

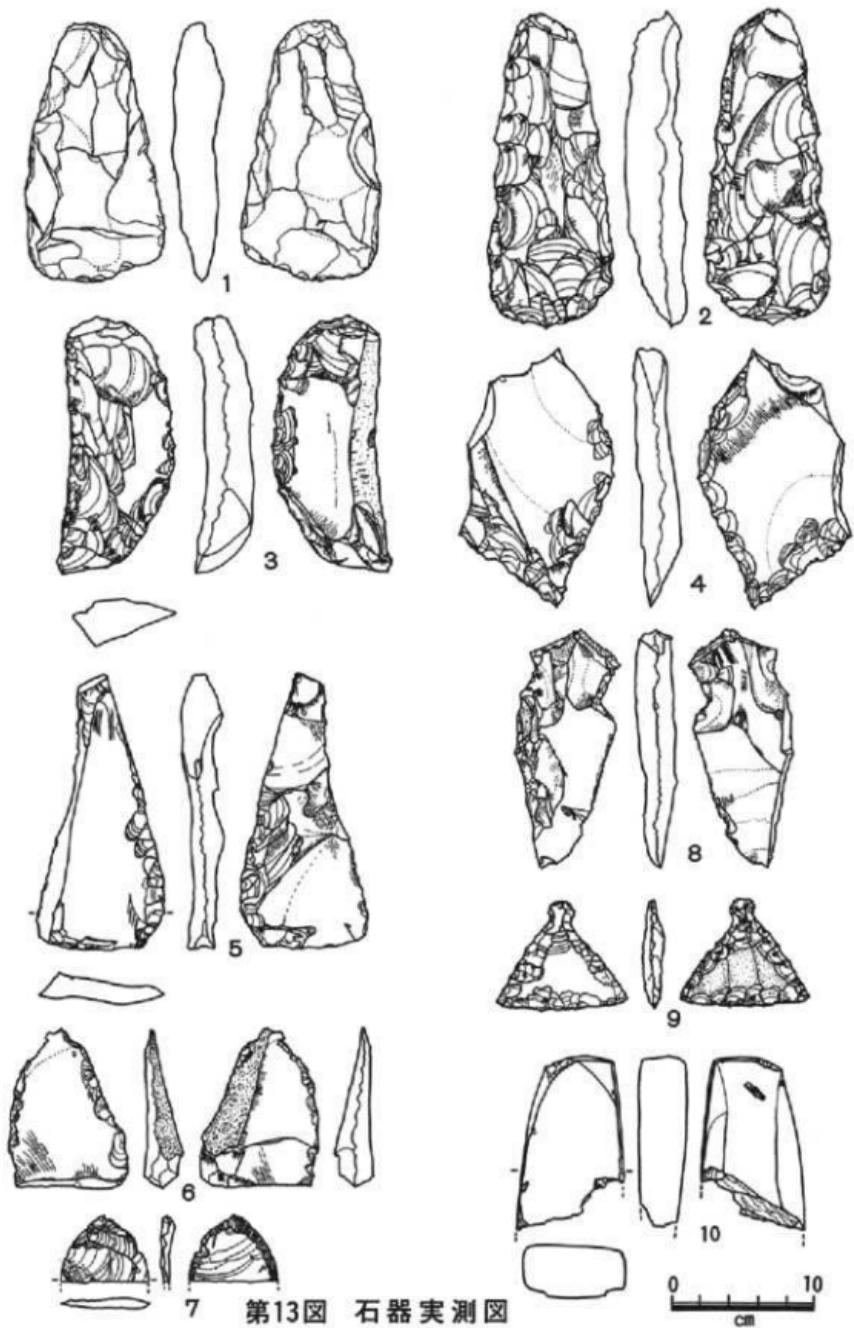
「石ベラ」と呼ばれているものである。1は粘板岩の綫長剝片を素材としている。両側面から刃部にかけて、入念な剥離が施されている。2は頁岩の綫長剝片を素材とし、両側面から刃部にかけて細かな剥離がなされ、先端部ヘリタッチで角度の大きい刃部を作り出している。

石匙 (7・9)

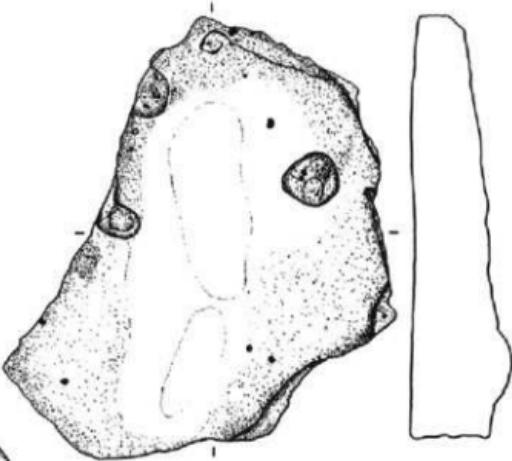
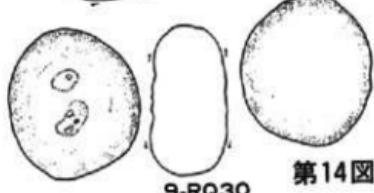
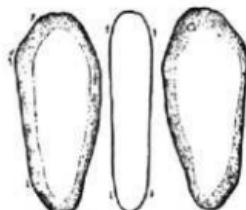
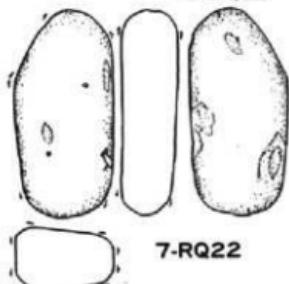
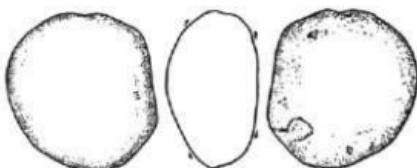
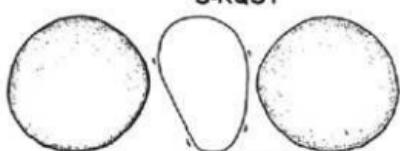
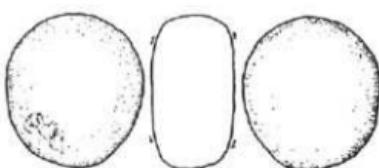
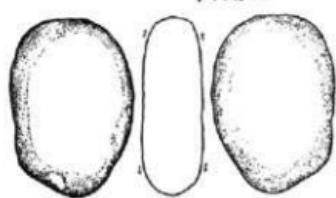
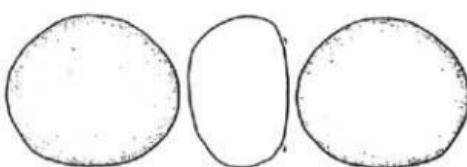
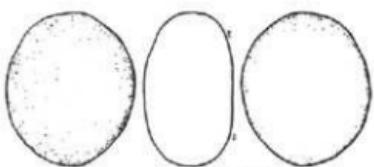
7は素材が黒曜石である。基部を欠損しているが、刃部が丸味をもち綫長石匙か箆状石器の刃部とも考えられるが、ここでは石匙の類に入れた。両面に加工があり、刃部に細かなリタッチが施されている。9は頁岩を素材とし、背面に自然面を残している。基部にえぐりの施されたつまみを有する「石サジ」と呼ばれているものであり、刃部がつまみの軸に対して直行する。つまみ部えぐりの調整は細かな剥離を行い器面全周に剥離が施されている。刃部にリタッチを施して、形状は三角形を呈する。

第一次剥離面はあるが、製作途中の石器を一括する。(3~6・8)

3は頁岩の綫長剝片を利用し、両側面に荒い第一剥離を施している。右側面は刃部の作りをしているが、左側面は厚い自然面を残している。推定ではあるが、搔器か削器の製作途中と考えられる。4は頁岩の横長剝片を利用し、両側面に第1剥離を施し左側面は途中で欠損している。先端部両側面には細かなりリタッチを施し鋭利な先端部としているが、側面は第一剥離である。石鎌、ないし石匙の製作途中と考えられる。5は頁岩の綫長剝片を利用し右側面を第一剥離面としてリタッチを施しているが、左側面と先端部は自然面を残している。先端部の剥離が石質で困難となり、途中となったものと思われる。綫長石匙の製作途中と考えられる。6は綫長頁岩を材質とし、両側面に第一剥離が施されている。製作目的は不明である。8は綫長頁岩の材質で、基部の両側に第一剥離によるえぐりを施しているもので両側面は自然面を残している。綫長石匙を製作しようとしたものと思われる。



第13図 石器実測図



0 cm

第14図 磨石・凹石・石皿実測図

b. 磨製石器 (第13・14図 図版12)

磨製石斧 (第13図・10)

刃部を欠損しているもので、あらかじめ石斧の大体の形を打ち欠きによってトリミングし、全面を磨きあげた磨製石斧である。片面の両側に溝を浅く磨いている。石質は緑泥片岩で1点出土。

磨 石 (1~8)

24点出土。石質は凝灰岩・安山岩・石荷粗面岩である。製作技法により4つのタイプに分かれれる。

a類 (1・2) 円形の凝灰岩を用い、片面を研磨し曲面を呈している。6点出土。

b類 (3・4) 円形の凝灰岩を用い両面を研磨、曲面を呈している。5点出土。

c類 (5・6) 円形の凝灰岩・安山岩を用い、片面の一部をのぞき他面を研磨している。3点出土。

d類 (7・8) 楕円形を呈し、凝灰岩・安山岩・石英粗面岩を用い全面を研磨している。断面は台形を呈している。11点出土。

凹 石 (9)

凝灰岩・安山岩を用い、片面に二点の凹みをもつもので両面を研磨している。

石 皿 (10)

扁平な凝灰岩を用い、片面を研磨したものである。研磨されている面がわずかに凹む。凹面に若干の凸凹がみられることから表面を敲打により凹ませた石皿と考える。5点出土。

IV まとめ

台地肩部で発見されたSK5土壙跡は貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴が住居跡外にあることは、縄文時代前期中葉から後葉にかけての集落跡にその例をみることができる(註1)。出土した土器も前期末(大木6式期)の時期を示すものである。

出土土器は中期初頭の土器片である。これら土器の文様は第一文様帯に集中しており、キャリバーや波状をなす器形の変化を示す。第I群土器は竹管文を主体とする半截竹管、及び棒状工具による平行沈線文・刺突文・曲線文・押引文であり、粘土紐貼付に刻み目を有するものもあり、これらは胎土に纖維を含まない一群である。第II群土器は縄文を主体とし、S字状連鎖文・羽状縄文・木目状撚糸文・網様文・單軸絡状体圧痕文を有するものである。

両群の土器は口縁部文様帯と胴部文様で分けたが、そのほとんどが個体として構成されるものである。このような文様構成は北陸地方の新保式(註2)や、円筒上層a1式(註3)に施文される縦条体圧痕文を施す例に近い。このように本遺跡で発見された土器は円筒系や北陸・越後地方の影響を強く受けた文様構成をなしている。竹管文を主体とする土器は信濃川中流域、小千谷・十日町周辺の中期初頭の土器と類似している。縦状体圧痕文を施す土器は秋田県大烟台遺跡(註4)や青森県中の平遺跡に出土している円筒系の土器に類似し、北方の円筒文化や南の北陸・越後地方の影響を受けている。山形県庄内地方の縄文時代は大木文化圏に位置してはいるが、前期から中期初頭にかけては円筒文化や北陸・越後地方の文化の影響を強く受けていると思われる。特に円筒系の文化は鮫海郡遊佐町吹浦遺跡(註5)にその例をみる。しかし円筒系や北陸・越後系の土器群がみられるものの、大木系と思われる土着の土器が若干見られる。前期から中期初頭の集落跡においては、南北両系統の文化と混合した状態で営なまれているものであろう。そして広義に解釈すれば大木7a式期に含まれるものと考えられる。

遺跡の性格としては、縄文時代中期初頭の集落に近い生産生活の場としての性格をもつものと考えられる。

註1 小島俊彰 1968 「北陸における前期末の様相」 信濃第20巻4号

註2 富山県教育委員会 1973 「縄文早・前・中期」 富山県史考古資料編

註3 江坂輝称 編 1970 「石神遺跡」

註4 磯村朝次郎 他 1979 「大烟台遺跡発掘調査報告書」 日本鉱業株式会社船川製油所

註5 酒井忠一 他 1955 「山形県鮫海郡吹浦遺跡」 致道博物館

参考文献

吉峰遺跡第4次緊急調査概報	1975	富山県教育委員会
砺波市嚴照寺遺跡緊急調査概要	1977	富山県教育委員会
火焔型土器	1979	新潟県教育委員会
長者ヶ原	1964	新潟県糸魚川市教育委員会
中村孝三郎 先史時代と長岡の遺跡	1966	長岡市立科学博物館

最後になったが、本編をまとめるにあたり下記の方々より貴重な指導・助言を賜わった。
記して感謝の意を表する。

佐々木洋治・佐藤庄一・佐藤正俊・名和達朗・渋谷孝雄・阿部明彦(山形県教育庁文化課)
佐藤楨宏(酒田市立中央高校教諭)

(敬称略)

図

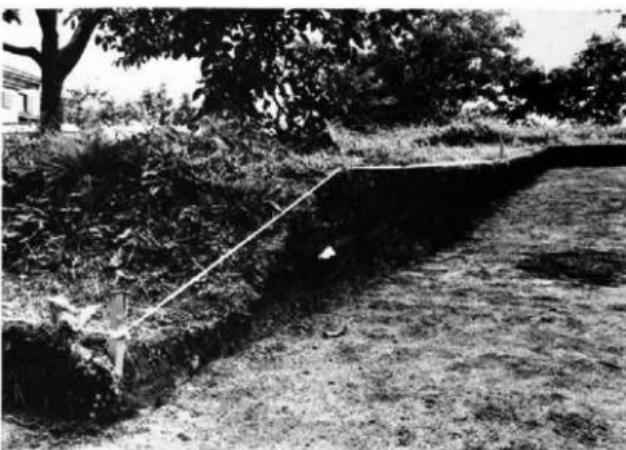
版

図版 1

遺跡近景 ▷
(南東より)



調査区土層堆積状況 ▷
(北西より)



調査区 ▷
(東より)



図版2

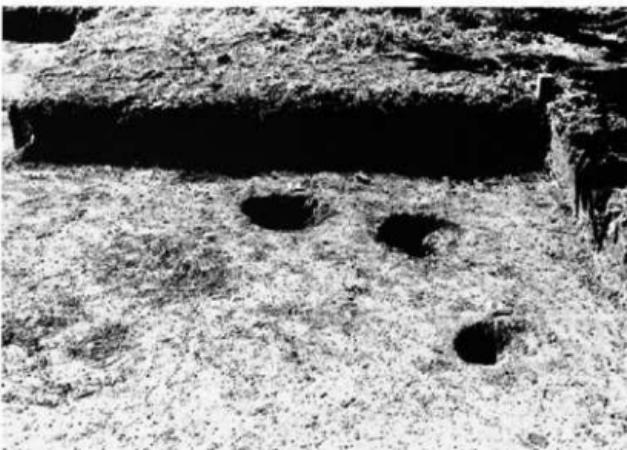
SK5土壤跡
土層堆積状況 ▷
(南より)



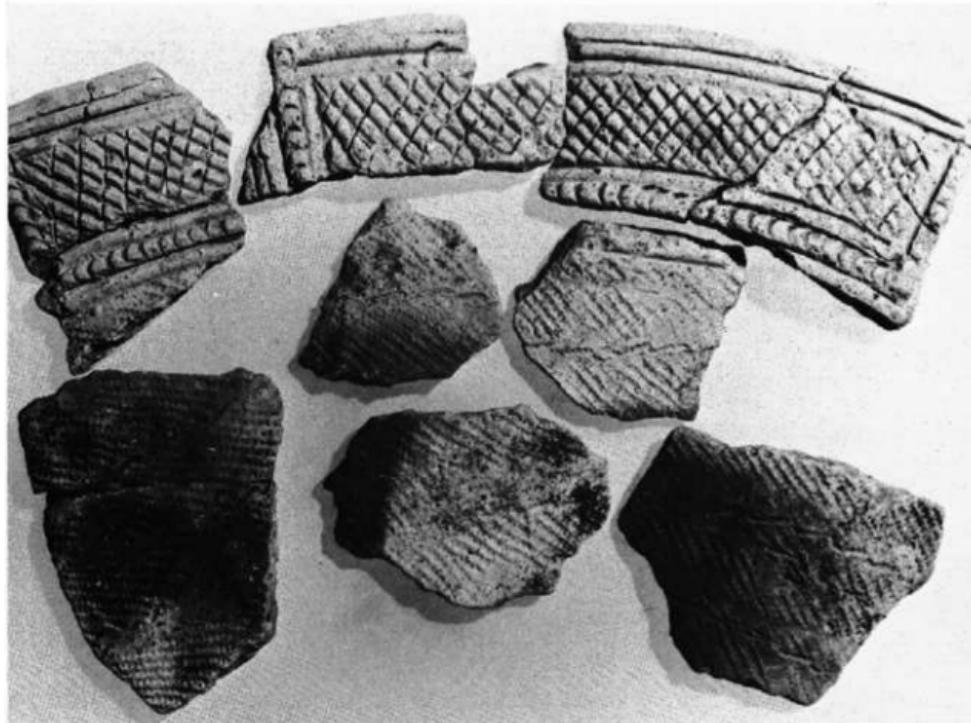
SK5土壤跡
完掘状況 ▷
(南より)



S P 群 ▷
(東より)

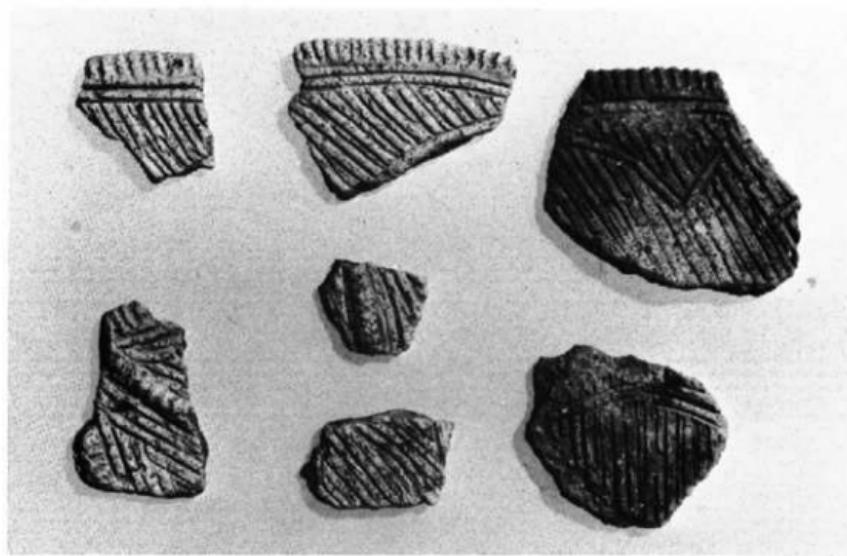
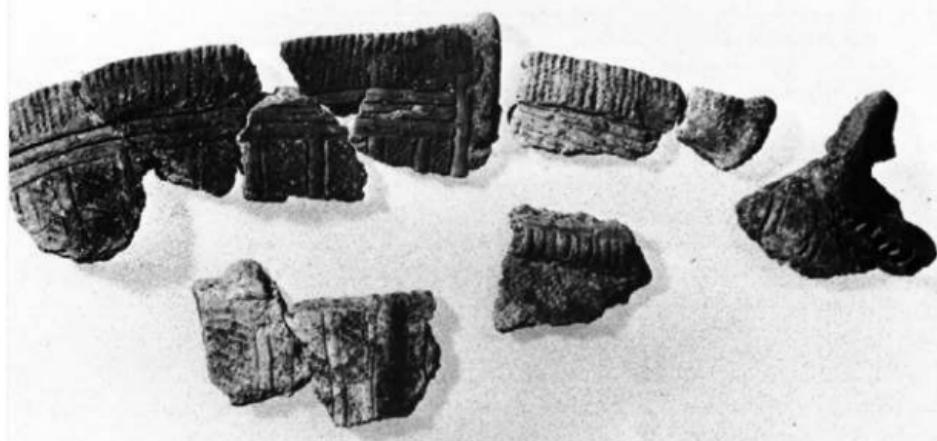


図版3



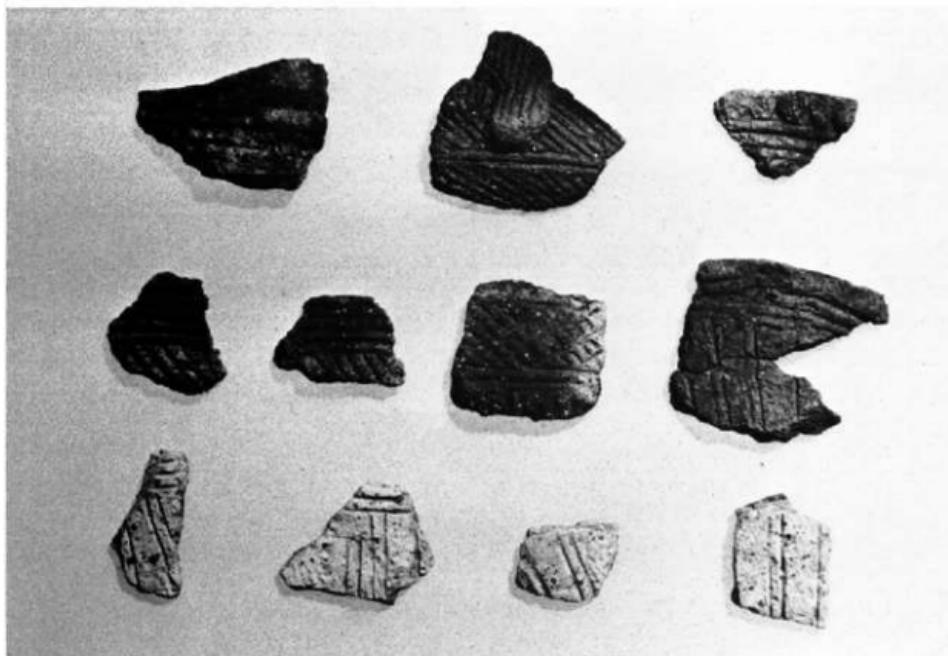
出土土器 上・下 I 群 a類

図版4

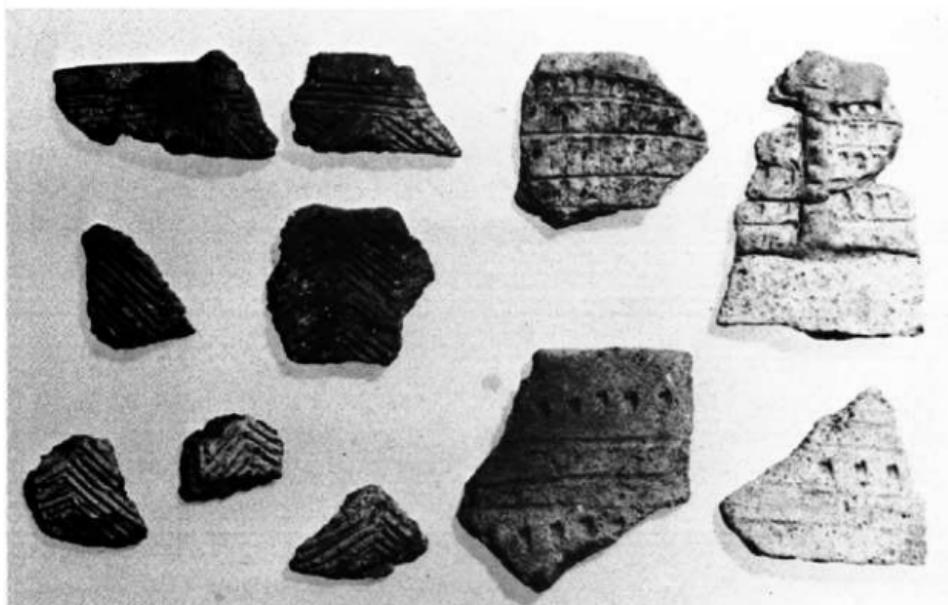


出土土器 上・下 I 群 b類

図版5

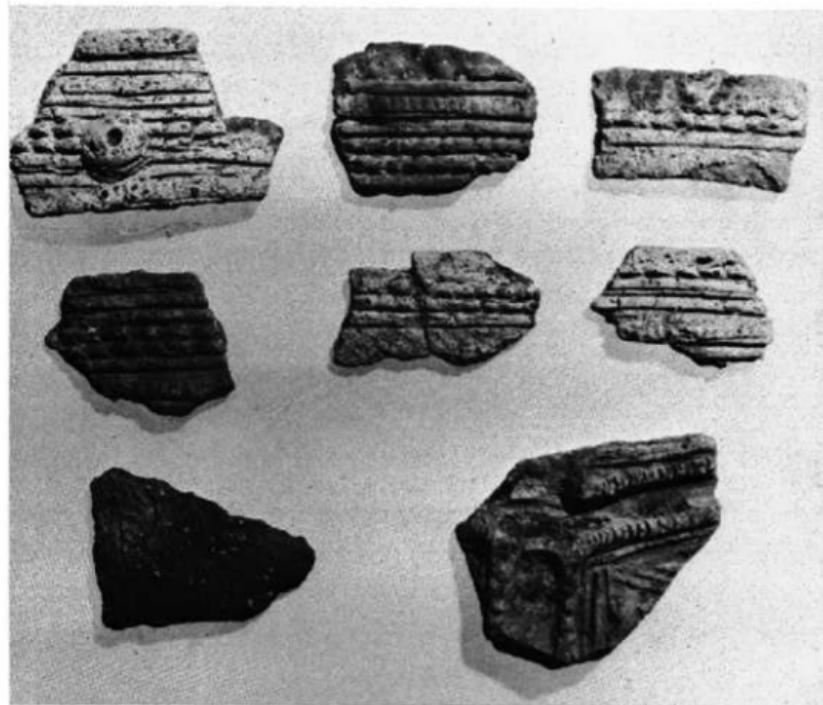


出土土器 I群 C類

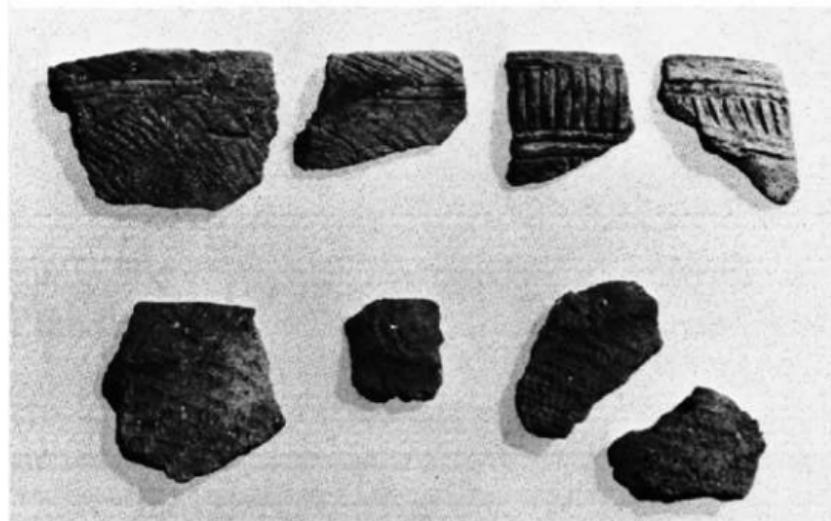


出土土器 I群 C類 d類

図版6

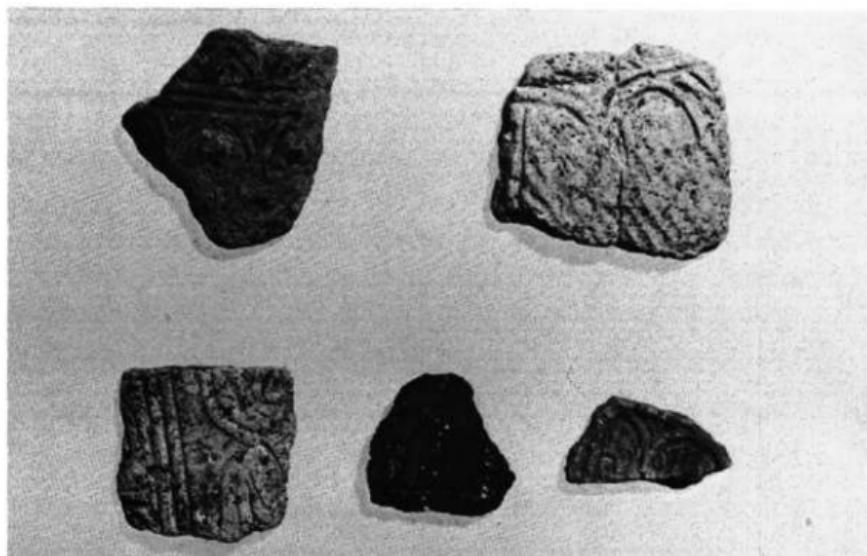


出土土器 I群 C類 e類

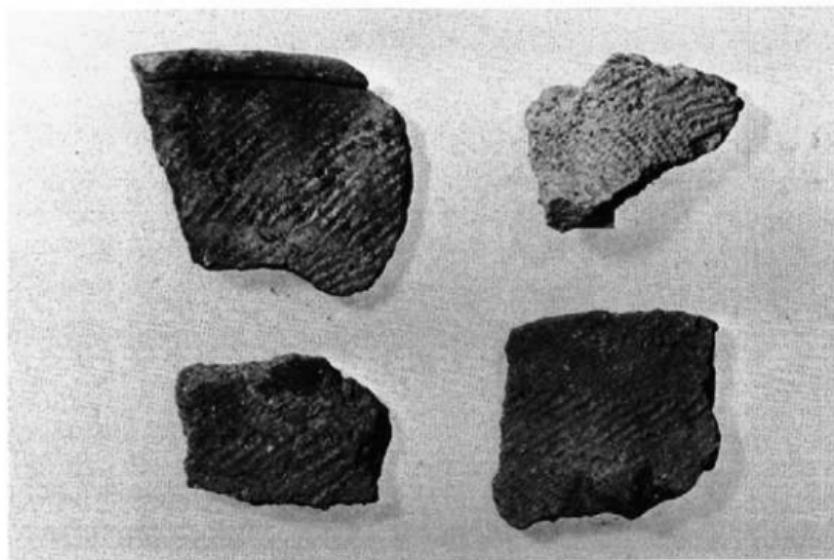


出土土器 I群 C類

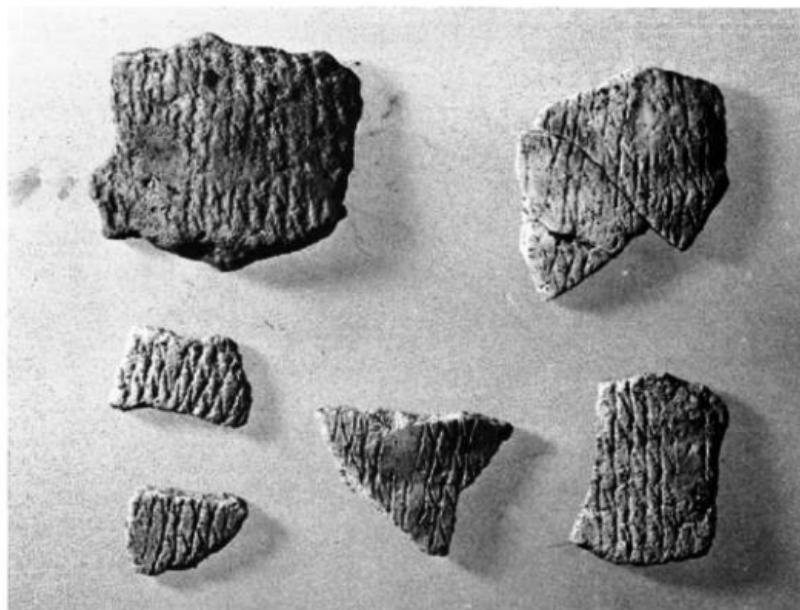
図版7



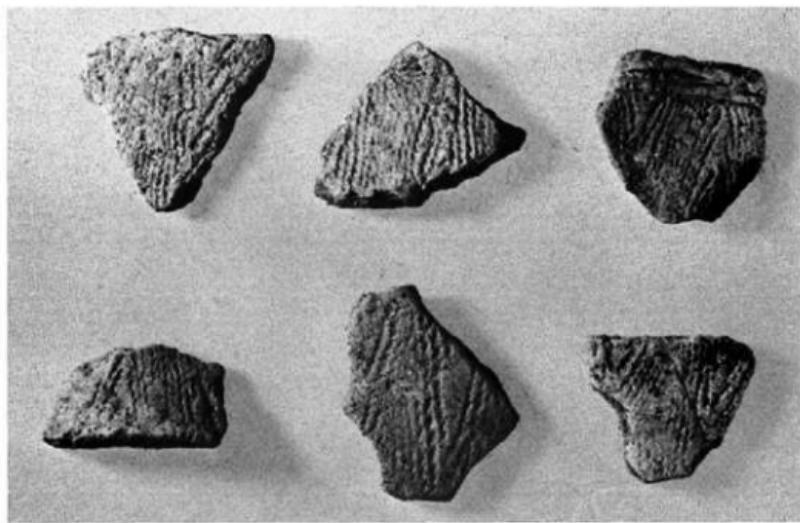
出土土器　I群　f類



出土土器　II群　a類

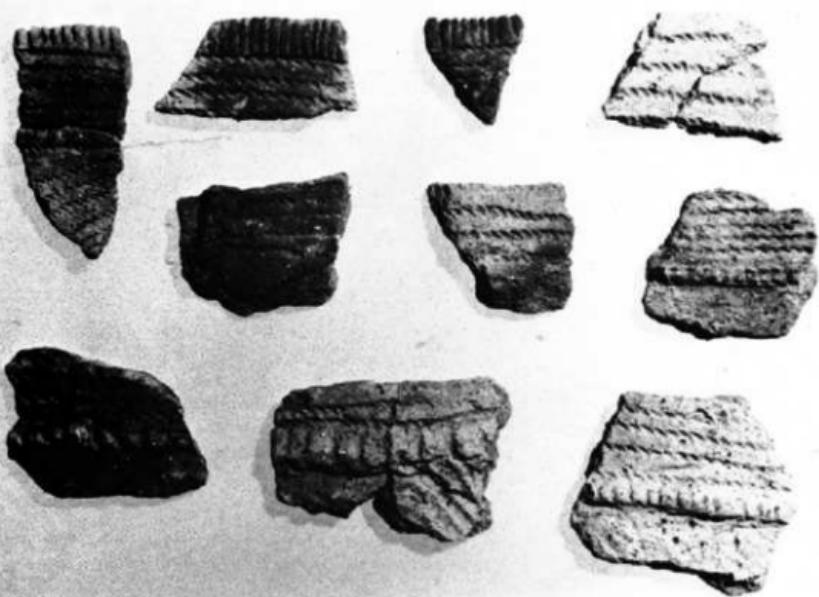


出土土器 II群 a類 (網様撲糸文)



出土土器 II群 a類 (木目様撲糸文)

図版9

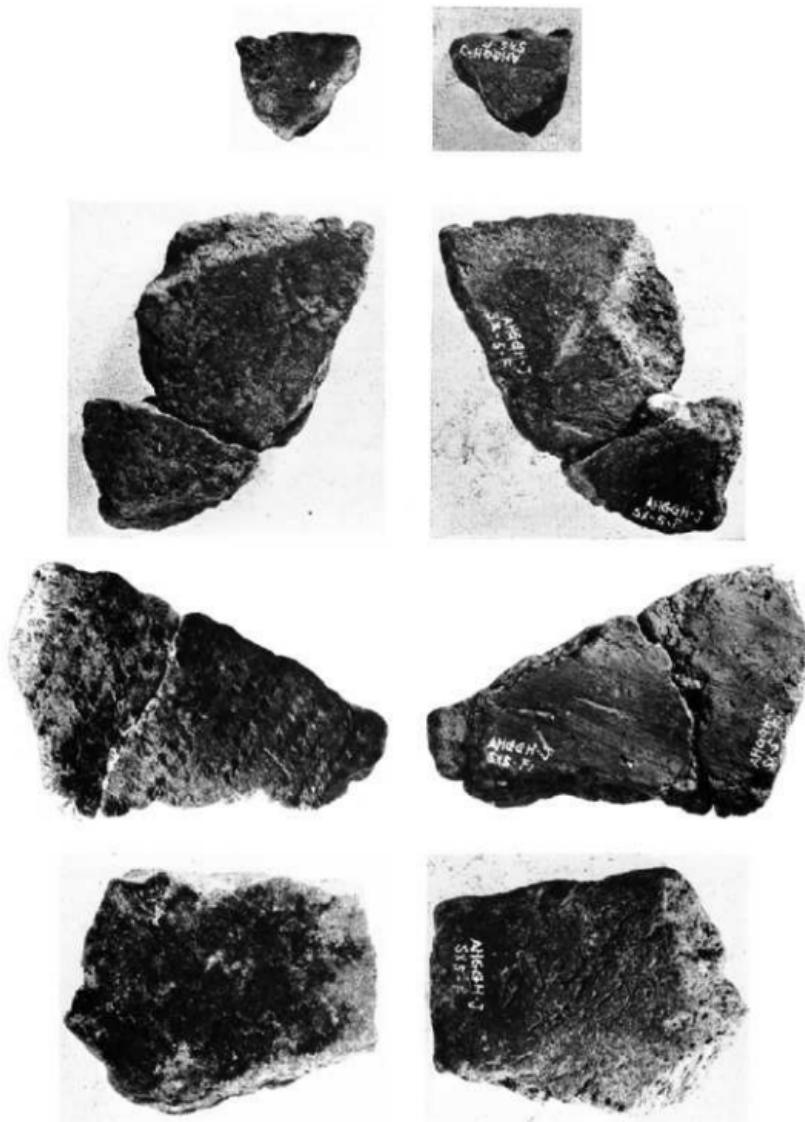


出土土器 II群 b類



出土土器 II群 c類

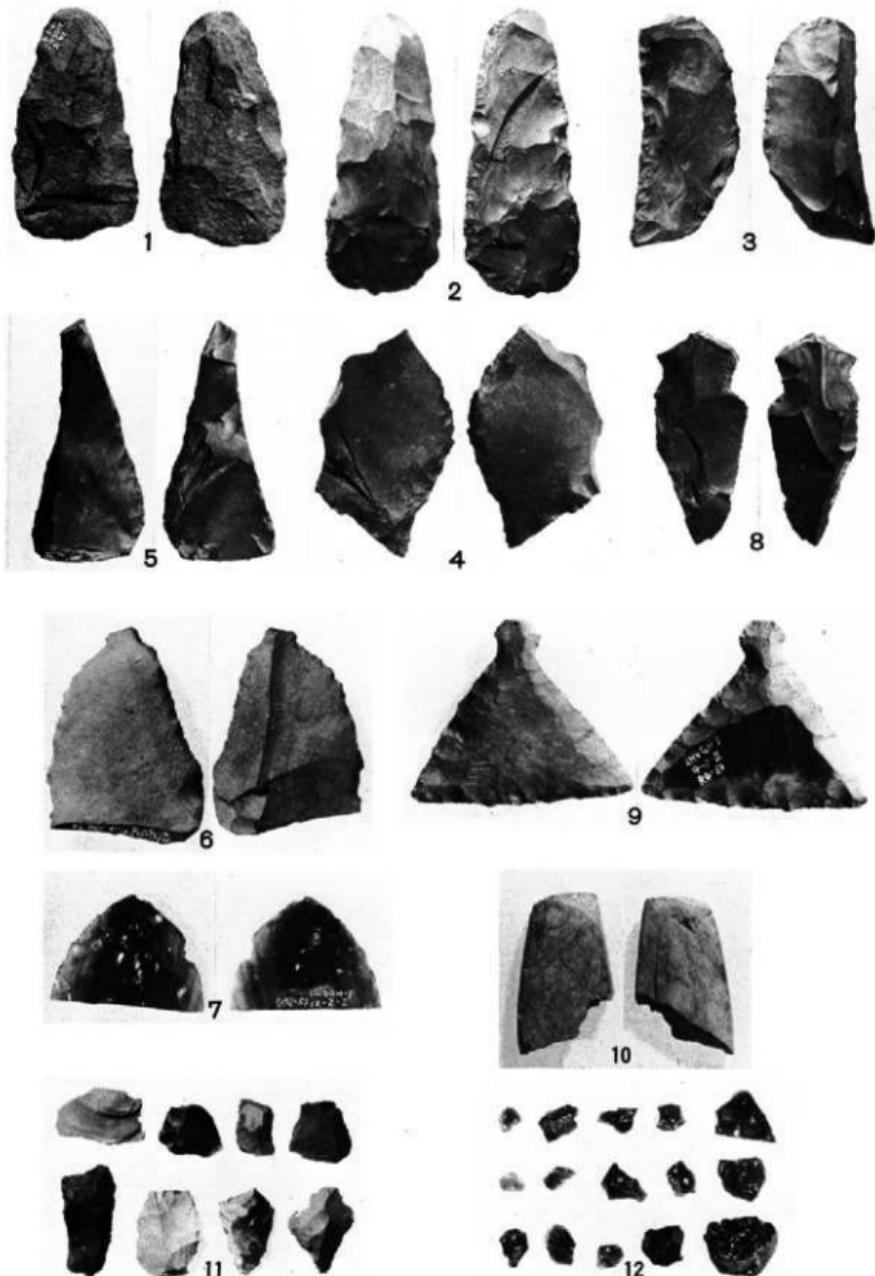
図版10



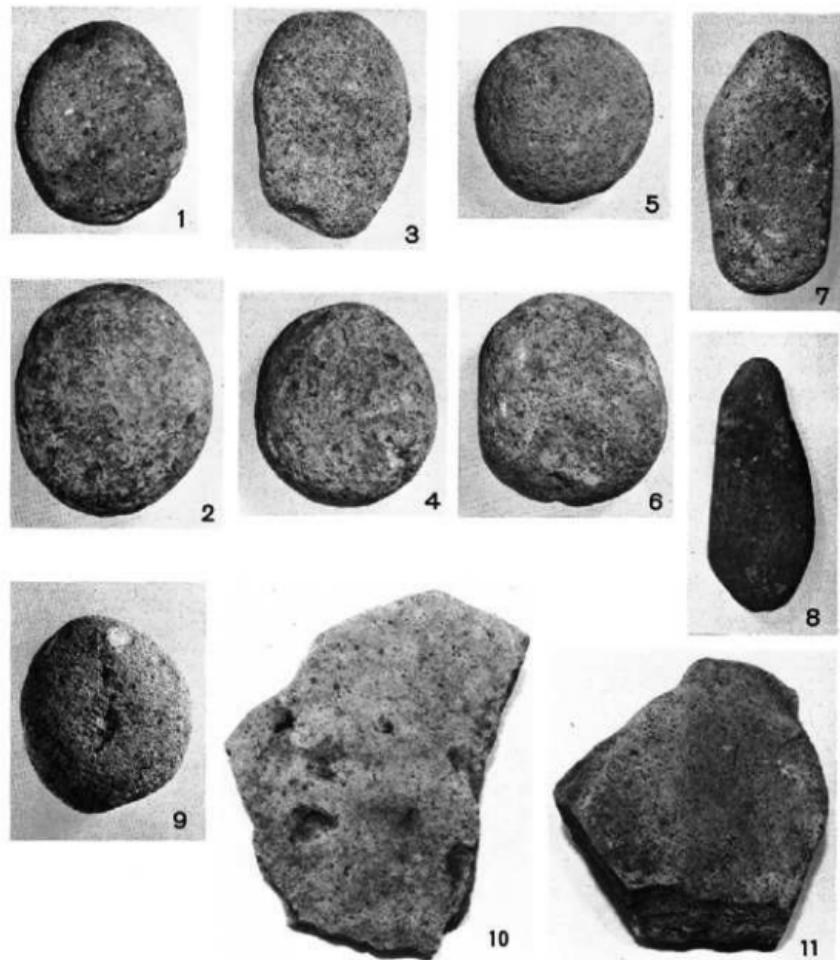
出土土器

SK5土壤跡

図版11



出土土器



出土石器

磨石 (A-I類 1・2 A-II類 3・4 A-III類 5・6 B類 7・8)

凹石 (9)

石皿 (10・11)

山形県埋蔵文化財調査報告書 第50集

こう
郷 の 浜 J 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書

昭和56年3月23日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社

鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080代
